

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

本年年初に展望では、2018年の世界経済環境に関しては2017年の延長線上にあり、大きく変化する要因は見当たらず、通貨の強さも2017年の構図をおおむね引き継ぎ、ドル/円に関してはレンジ内で安定的に推移する可能性が高いと考えてきました。

堅調な米景気、FRBの利上げ観測の継続はドルを下支えし、緩やかなドルの上昇が期待できるため、大幅なドル下落のリスクは低いように考えられるものの、2017年12月のFOMCで発表されたドットチャートによると2018年は3回の利上げが予想であり、その点から考えると米国の長期金利の上昇幅は限られたものとなる可能性が高く、ドルの上値も限りがありそうで、昨年の高値水準が上値目標としてきました。

しかし、1月の相場は、年初に113円台の高値を付けて以降、ドルはじり安となり1月後半には108円前半まで値を下げました。

さらに2月に入ると、トランプ米大統領が洗濯機と太陽光パネルに対してセーフガード（緊急輸入制限）を発動することに署名し、貿易摩擦に対する懸念が拡大したことやムニューシン米財務長官が「弱いドルは貿易面で米国の利益になる」と発言したことなどをきっかけにドル安の流れが強まり、さらに米金利の急上昇と米株の急落を背景としたリスク回避姿勢の強まりから円買いが強まり、下値めどとしてきた昨年安値107円水準を下回り104円台にまで突入しました。

しかし、その後は良好な米国経済を背景にドルの買い戻しが進み110円台を回復する動きとなって

ドル/円相場のトレード戦略

います。

6月のFOMCでは本年4回の利上げ期待を高める内容となっており、また初の米朝首脳会談を無事こなしたことでアジアの地政学リスクも低下しており、ドル/円は底堅い動きが予想されます。もともと、米国を中心とした貿易摩擦の激化はドルの上昇抑制要因であり、この点を考慮すると年後半もレンジ相場が継続するという見方を大幅に変更する必要はないものと考えられます。

■短期展望

先週は、日米通商協議を控えて111円半ばが重く、111円前半を中心とした狭いレンジ取引が続きました。

週後半では、日米通商交渉への警戒感やトルコリラの急落などが受け、ドルは軟調に推移し、一時110円半ばまで下落し、110円後半で週を越えています。

今週は、東京勢がいわゆる「盆休み」で流動性が乏しくなるため、ドル/円は蚊帳の外となる可能性もありそうです。

先週からの流れを引き継ぎ、リスク回避行動がドルの上値を抑える一方、堅調な米国経済と、それを背景とした利上げ継続観測がドルの下値を支える構図に変化はありません。

ただし、先週はドル安の流れで週を越えているため、取引レンジはやや下方に変動し、109円後半から111円後半程度を想定します。